

新島襄と八重夫妻

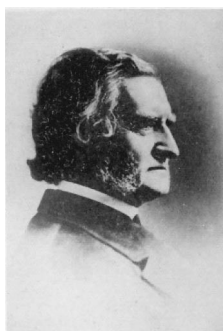
― 日本最初のモダン・カップル ―



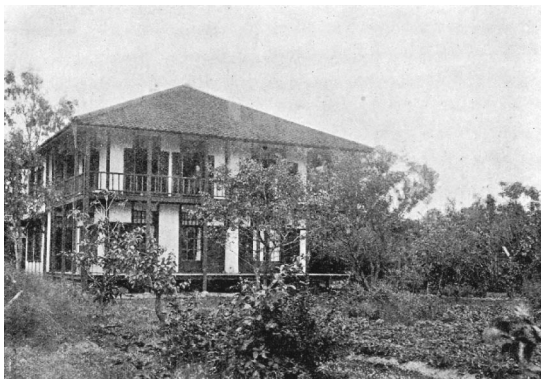
1 新島襄と八重夫妻



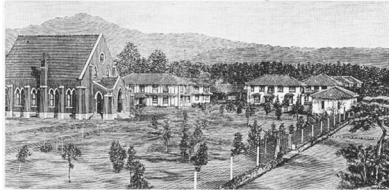
2 八重の兄（襄の義兄）山本覚馬



3 新島の「アメリカの父母」ハーディー夫妻
(左) アルフィーアス、(右) スーザン
(新島遺品中の写真)



4 新島の新居



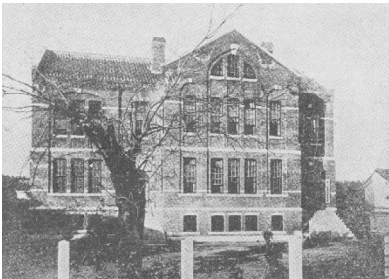
5 1886年頃の同志社英学校
(白亜の建物は、2階が学生寮、1階が教室)



6 同志社女学校最初の校舎



7 同志社波理須理化学学校
(現 ハリス理化学館)



8 同志社政法学校
(現 有終館、現在は入口が右側になっている。)

まえがき

NHK大河ドラマの「大河」とは文字通り大きな河の意味です。山の奥の小さな泉から小川が生まれ、そのような小川がいくつも合流して大河となり、沿岸に人々の暮らしの場である街を発達させながら大海に至る。ヨーロッパには、ライン川、ドナウ川など複数の国の中をとうとうと流れる雄大な国際河川がありますが、そのような山の小さな泉から海に至る大河の一生のように人間の成長の歴史を時代の流れの中で発展的に描いたドラマが大河ドラマです。その呼称は、ベートーベンをモデルにしたといわれるロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』のように二〇世紀前半にフランスで多く書かれた大河小説にちなんだものです。

日本で大河ドラマと言えば、地上波で毎週日曜日の夜に放映されるNHK大河ドラマの代名詞。それほどNHK大河ドラマは国民的な歴史ドラマになっています。

その歴代の主人公は、豊臣秀吉や徳川家康、伊達政宗、明智光秀など教科書に登場するような有名な歴史人物やその正室などが主でした。

ところが、七年前、二〇一三年のNHK大河ドラマ「八重の桜」でほとんど初めて、それまで一般にはまったく知られていない女性が主役に抜擢されました。

同志社英学校校長新島襄の妻・八重です。

その二年前の二〇一一年六月、NHKが「二〇一三年の大河ドラマは『八重の桜』。新島襄の妻・八重の生涯を描きます」と発表すると、日本中で「新島八重って誰？」という疑問が沸き起こりました。

ところが、その一年七カ月後の二〇一三年一月、「八重の桜」の放映が始まる頃には、新島八重は様々な雑誌で取り上げられ、彼女を描いた本やムック類も優に八〇種類を越える数が出版されるようになり、新島八重は、幕末・明治期の日本で最も活躍したヒロインの地位を占めるようになりました。

大河ドラマ「八重の桜」では、綾瀬はるかさん扮する八重が、会津籠城戦を戦い、最初の夫・川崎尚之助（長谷川博己さん）と離別した後は、京都でオダギリジョーさん扮する新島襄と出会って結婚し、襄と共に新しい時代を切り開くために奮闘する姿が描かれました。

しかし、大河ドラマもドラマである限り史実とは異なります。ドラマとは、視聴者を意識した作家の脚本を元に監督や俳優陣、スタッフが総掛かりで作り上げる創作です。

それでは、本当の八重や襄はどういう人だったのか。また、戊辰戦争の実際はどうだったのだろうか。放送当時、新島襄や八重、襄の愛弟子の蘇峰、そして幕末維新史を研究する私にも、多くの方々からこのような質問が寄せられました。

そこで私は、実証主義に立つ歴史家の立場で改めて、新島襄と八重、そして戊辰戦争、さらには新島が取り組んだ日本最初の私立大学設立運動の史実を述べたいと思います。

ところで、人物を知るには、その人と思想を知る必要があると言われますが、その一方で、「人はその交わる友によって知られる」という言葉の通り、本当にその人を理解するためには、交友関係、既婚者の場合は当人の妻や夫、すなわちパートナーを知ること重要です。

しかし、日本の人物評伝では、その人物が既婚者の場合でも、パートナーについては、わずかに名前と出自程度が紹介されるだけで、その他は、ほとんど取り上げられてきませんでした。

新島襄の評伝でも、NHKの「八重の桜」の制作発表以前に出版された本では、彼の妻八重は端役、山本覚馬の妹

という出自と会津籠城戦のエピソードが若干触れられる程度でした。

その一方で、先ほど述べた、「八重の桜」の制作発表以降に出版された八重に関する本では、同志社関係者が執筆した二部を除いたほとんどすべてが、会津時代つまり新島と出会う以前の時代の八重が主に描かれて、襄との出会い以降の話はエピソード的に述べられているだけです。

なぜ、日本の評伝では、その人物が既婚者でもそのパートナーが取り上げられなかったのかというと、日本の歴史研究においては未だ夫婦を描く方法論が確立していないからではないでしょうか。

この点に関しては、同志社における新島の同僚だったアメリカ人のJ・D・デイヴィスはさすがです。彼が一八九四年にアメリカで出版した新島伝では、口絵に新島襄夫妻の写真を掲げており（本書口絵1）、新島の生涯における妻八重の存在の重要性を示しています。現代では、「八重の桜」で時代考証を担当された本井康博先生の『新島襄を語る』シリーズ（思文閣出版）でも新島と共に八重が語られています。私は、そのような同志社系の歴史研究の伝統に則り、本書で、新島襄と八重を一組の夫婦として捉え、夫婦の関係と生き方を通して、二人の実像を描こうと考えました。それは、新島襄と八重の史実をより深く知って頂くために選んだ叙述法ですが、人物評伝の記述方法の一つの試みでもあります。

なお、新島襄は何度も名前が変わっています。幼名が七五三太^{しゅめ}、元服名が敬幹です。脱国してワイルド・ローヴァー号のテイラー船長から「ジョー」と呼ばれます。そして、アメリカの養父であるハーディーから「ジョーゼフ」と改めて呼ばれ、帰国直前にミドルネームに「ハーディー」という養父名を入れて、英語では、「ジョーゼフ・ハーディー・ニイシマ（Joseph Hardy Neesima）」を自分の正式な名前にしました。そして帰国後は新島襄としました。

本書では新島の全生涯を描きますので、彼だけはずっと変わらない新島という名字で表現し、第三部の新島夫妻を描く場合に限って名前の襄を多用しました。その結果、一部で「新島と覚馬」というように、姓と名を混用した表記

をしています。また、本文中の引用文は一部を現代表記に改め、必要に応じて句読点を補いました。いずれもご了解下さい。

新型コロナウイルスの感染が世界中に蔓延し、長期化しています。コロナ・ウィルスを避けるための社会活動の自粛により、経済的に生活が困難になったり、家庭内暴力や「コロナ離婚」も増えています。

新型コロナウイルスによって現代社会は一変し、世界中が困難に直面する時代こそが現代になったのです。

その困難な現代に我々はどう生きるか、パートナーがいらつしやる場合は、そんな環境の中で二人はどう生きるべきか。そして万一、不幸にも大切な人やパートナーと別れなければならなくなった場合に、その後自分はどう生きるべきか。

新島襄と八重という一組の夫婦の生き方が読者の皆様に多くの示唆を与えてくれることを願っています。

二〇二〇年九月

著者

新島襄と八重夫妻

― 日本最初のモダン・カップル ―

目

次

まえがき	i
------	---

第一部 裏の志	1
---------	---

第一章 安中藩士時代の新島	2
---------------	---

第二章 アメリカでの学生時代の新島襄	20
--------------------	----

第三章 岩倉使節団と新島襄	28
---------------	----

第四章 同志社英学校の開校	41
---------------	----

第二部 八重の精神	53
-----------	----

第一章 会津藩と士魂	54
------------	----

第二章 籠城戦となよ竹たちの戦い	65
------------------	----

第三章 開城後の八重の足取りと京での新生活	89
-----------------------	----

第三部 新島襄と八重夫妻 日本最初のモダン・カップル	95
----------------------------	----

第一章 新島襄と八重の出会いと婚約	96
第二章 八重の受洗と二人の結婚式	102
第三章 日本最初のモダン・カップル	113

第四部 日本最初の私立大学設立運動と新島の逝去	131
-------------------------	-----

第一章 日本最初の私立大学設立運動	132
第二章 新島への不治の病の宣告と八重の看護	142
第三章 大学専門部の具体化とリベラル・アーツ・カレッジの開校	146
第四章 新島の逝去	158
第五章 その後の私立大学専門部設立運動	161

第五部 新島逝去後の八重	167
--------------	-----

第一章 新島の逝去と八重の落胆	168
-----------------	-----

第二章	篤志看護婦人会への入会と裏千家入門	172
第三章	八重における茶の湯とキリスト教	176
エピソード	日本最初のモダン・カップルとその後の日本の夫婦	181
あとがき		185
写真出典		187